

# 価値観は変わるもの

えのもと ともこ  
榎本 朋子

●自治労・総合企画総務局長

「なんだかんだとっておりますが…。まだ何もっておりません（会場大笑い）。落語家で人間国宝の柳家小三治師匠。異名はマクラの小三治とは落語通の友人の弁。

10月下旬、連合寄席に参加しました。同じ落語家の柳家でもこの日は喬太郎師匠と柳家小せん師匠、漫談と前座の4人です。会場の連合会館に用意された椅子はほぼ中高年層で満席。約1時間半を超える演目を堪能し、普段と少し違った空気感を味わうことができました。

また過日、東京ドームへ行った時のこと。周辺は若者でごった返し、歩くのもやっとのありさまでした。店の人に聞くと「アニメーションの催しがある」とのことで、連合寄席の観客とは異なり、こちらは若者ばかり。

—さて。「連合寄席と言われてもねエ。何の連合？どこと連合？なんつってね」と喬太郎師匠。で、こうも言いました。「私は個人事業主だ」と。個人事業主はいろいろと大変で、そんな大変な業界にもかかわらず、若者の落語家志望が少なくないそうです。真打ちの師匠と呼ばれるには15年は普通で、なおかつ経済的にも安定しません。少なくとも落語家になるには、話すことが好きじゃないと務まりません。一方、地方自治体の職員に応募する若者に聞くと、表面的には住民サービスの提供に興味を覚えるという方もいますが、やはり安定的な職場環境にも魅力があるようです。

そのコトが好き。だから経済的な安定は二次という一方で、経済安定第一主義を望む若者も多くいます。多分どちらとも正解なのでしょ

う。同じ落語家でも、噺家（はなしか）と呼ばれたい人がいるそうです。また「面白い人か上手な人かのどちらかになれ」とも言われるそうです。たしかにプロと呼ばれる人たちは、話術の面白さや上手さだけで勝負ができますが、自治体職員はこうはいきません。「融通が利かない・役所仕事」などという言葉聞きます。これにすぐに反応して「融通が利き役所らしくない仕事」と、短絡的に物事を考える傾向も見え隠れしますが、まずその前に、「融通が利かない・役所仕事」だからこそ自治体職員が務まり、住民も安心して暮らすことが担保されることもあるのです。

どんな立場であれ「あてになる人」になるということです。好きこそもの上手なれ」や「下手の横好き」などの慣用句は、最近あまり使わない言葉でしょう。仕事が楽しいという人、楽な仕事はないという人、危険・キツイ・汚い仕事はしたくないという人、目立つことがしたいという人、さまざまです。職業柄、人前で話すことが時々あります。もちろん組織の考え方と同時に、自分の役目としての感想を加えることもあります。

最近、何人かの若年層の方の姿勢や考え方を見る機会がありました。自分自身も若い頃から比べれば、価値観が変わり考え方も成長？したかもれませんが、「人」を見る目はしっかりと持ち続けたいと思いながら、落語通の友人の影響で物事の捉え方に変化があるということを実感した一日にもなりました。